View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

北海道内高等学校ダンス部の現状（1）
― DANCE × DANCE WORKSHOP CARAVAN の活動を通して―

柴田詠子

1. はじめに

平成 24 年度から施行された新学習指導要領によって、中学校の体育の授業でダンスが必修化された。特に「現代的なリズムのダンス」の一つとしてメディアで多く取り上げられ、注目されているヒップホップダンスは小学生から高校生の間でブームとなっている。

このダンスブームの流れを受け、札幌大学（以下、本学）においてもダンスに対する取り組みが行われている。

平成 25 年度から北海道内（以下、道内）でストリートダンス普及の活動を行っている「KING PRO.」と共同で学内に「札幌大学ダンスプロジェクト：SPADE」を立ち上げ、幼稚園児～高校生対象のダンススクールを運営し、地域のこどもたち約 60 人が活動している。また同時に立ち上げられた「札幌大学ストリートダンス部：SPADE」では、本学の学生約 15 人がこどもたちの活動をサポートしながら、自分達のダンス活動を行っている。

この「：SPADE」発足を記念して、平成 25 年 8 月に本学のオープンキャパスと同時に開催された高校生向けのダンスイベント「DANCE×DANCE HIGHSCHOOL」には、100 人近くの高校生が参加し、部活動でダンスに取り組んでいる高校生が多くいることが改めて印象付けられた。

ここ数年で、高等学校の部活動の中でもダンスが注目されるようになり、道内においても現在約 30 校のダンス部（同好会含む）が活動している。部員数の多いところでは 30 人～ 50 人ほどの部員が所属する高校もあり、年々部員数も増加傾向にある。

また、道内で行われる高校ダンス部対象のダンス大会も増えてきてい

る。現在は、NPO 法人ミス・ダンスドリル・インターナショナル・ジャパン主催「全国高等学校ダンスドリル選手権」（以下、ダンスドリル）、一般社団法人ストリートダンス協会主催「Fit's DANCE STADIUM 日本高校ダンス部選手権」（以下、DANCE STADIUM）[注1)]、一般社団法人ユナイテッド・スピリット・アソシエーション　ジャパン主催「USA Competitions」（以下、USA）などの大会が北海道地区予選を開催し、参加高校も年々増加している。

そこで、今年度は、「:SPADE」の広報活動の一環として、「DANCE × DANCE × WORKSHOP CARAVAN」を企画し、実施した。プロダンサーによる技術指導を行い、道内高校ダンス部のダンススキルの向上を図ることを目的とし、道内の高校 7 校を訪問し、「KING PRO.」（:SPADE インストラクター）によるダンス実技指導を行った。

こうした活動を進めていくうちに、高校ダンス部に共通する課題がいくつか見えてきた。例えば、実際に技術指導ができる教員やコーチがいる高校が少ないこと、活動場所や環境が整備されていないこと、学校内で十分な活動支援体制ができていないという高校が多かった。

このような現状をダンス部に所属する生徒たちがどのように感じているのか。日常の活動実態やダンスに対する意識を調査するために、上記のワークショップに参加した生徒を対象にダンスに関するアンケート調査を行った。また、アンケート調査から読み取れた課題をより深く掘り下げるため、後日札幌市内の 2 校のダンス部の顧問の教員に協力頂き、インタビュー調査を行った。

高校ダンス部の活動実態については、東京都における調査が先行しており（中村・勢端・布施，2014）、他の地域の傾向を捉える研究が課題となっている。

北海道地区のダンス部の活動実態の傾向を調査する本研究はその嚆矢として、また東京都に関わる専攻研究の考察に比較検証する視野を与えるものとして独自の意味を持つ。また、ダンス教育を実践する筆者の立場からは、実態調査から見えてきた諸課題に対し、今後どのような改善策を取ることができるかも検討していきたい。

2. 調査方法

1）実施期間

2014 年 7 月 14 日（月）～ 10 月 14 日（火）市内 3 校、市外 4 校（旭川・石狩・江別・富良野）、計 7 校で実施。いずれもワークショップ受講後にアンケート調査行い、その場で回収した。

2）対象

ダンス部（同好会）に所属している高校生 121 人を対象にアンケートを実施。学年別に見ると、1 学年 51 人、2 学年 57 人、3 学年 13 人が参加している。3 学年は 7 ～ 8 月が引退時期のため、参加者が少なかった。男女別で見ると、男子 13 人、女子 108 人と女子が圧倒的に多い。いずれの高校も大会等に参加している高校で、比較的活動が盛んなダンス部 7 校を対象に調査した。

有効回答数：115 件

回収率：100%

3）アンケートの内容

アンケートの内容は、生徒が「どれくらいの経験があり、どのようなダンスに興味・関心があり、現時点でどのような問題に直面しているか」という観点を調査するために項目設定をした。

【アンケート内容】

・ダンス経験年数

・ダンスレッスン経験の有無（スタジオ名記入）

・好きなダンスのジャンル

・ダンスについての悩み

・ワークショップ受講の感想

3.DANCE × DANCE × WORKSHOP CARAVAN　企画概要

1）実施目的

全道の高等学校ダンス部・同好会を対象とし、本格的なストリートダンスのレッスンを提供し、生徒のダンススキル向上とモチベーションアップを図った。(実施回数は各校によって異なる。)

2）実施データ

・実施期間　2014 年 7 月～ 10 月
・実施校　7 校
・実施回数　12 回
・参加生徒数　121 人

3）ワークショップ内容

ワークショップは 3 人のストリートダンスを専門とするインストラクター（MAME、SE-YA、u-dai.）がそれぞれ交代で講師を担当した。内容はストレッチ、筋力トレーニング、アイソレーション（部位別練習）、リズムトレーニング（ダウン、アップの練習）などの基礎的なもので、最後に HIPHOP のコンビネーションという内容である。コンビネーションに関しては、各校のレベルに準じたもので、内容や長さは異なる。時間は 1 時間～ 2 時間程度である。また、レッスン後には普段部活動で取り組んでいる作品の鑑賞に対し講師がアドバイスを加えたり、ダンスに関する質疑応答を行ったりと、部員たちと交流をとる時間を設けることができた。

4. アンケート調査の結果

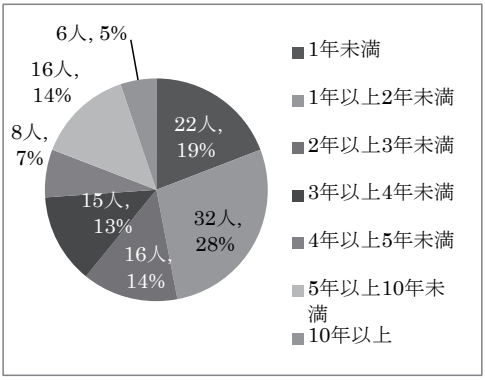
1）ダンス経験年数

115 人中、最も回答が多かったのは 1 ～ 2 年で 28％を占めている。ダンス経験 3 年未満が 61％を占めており、初心者が多いことが分かった。[注2)] ほんの少数であるが、ダンス経験 10 年以上という生徒も中にはいた。

（図１参照）

また、学年とダンス経験年数との相関を見てみると、1学年の44%が1年未満、2学年の46%が2年未満、3学年の54%が3年未満と学年と経験年数がほぼ合致しており、高校の部活でダンスを始めた生徒が約半数を占めていることが分かる。（図２参照）

図1　ダンス経験年数

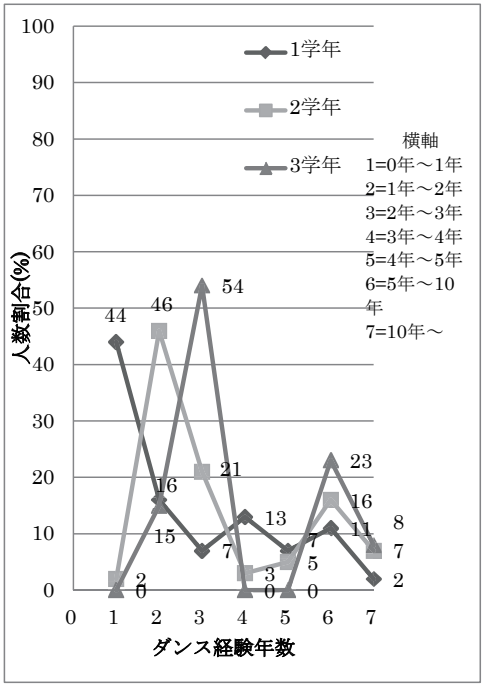


2）高校の部活動以外でのダンスレッスン経験

115人中63人（55%）の生徒が部活動以外でのダンスレッスン経験ありと回答した。（図３参照）内訳を見てみると、ダンススタジオ、ZIPやコナミなどのフィットネススタジオのダンスプログラムが多くを占めている。またワークショップ等単発で受講したことがあると回答した生徒も多く、中には過去に本学で開催されたダンスワークショップに参加したと回答した生徒もいた。

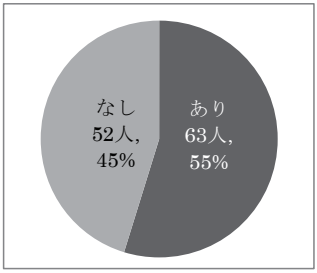
部活動に技術指導者がい

図2　学年とダンス経験年数との相関



ない学校が多く、部活動以外でダンスのスキルアップの機会や外部からの刺激を求めていることがわかる。

図3　部活動以外でのダンスレッスン経験



3）好きなダンスのジャンル

複数回答可で集計した結果、115 人中 77 人（67％）が HIPHOP と回答。HIPHOP は男女共に人気があり、ほとんどの高校で HIPHOP が取り入れられている様子である。ダンスドリルや DANCE STADIUM の大会でも HIPHOP の作品で参加する高校が多い。次いで人気のあった JAZZ や GIRL'S HIPHOP は女子生徒に人気のあるジャンルで、男子生徒においては LOCK、POP、BREAK などの OLD SCHOOL のジャンルが人気を占めている。道内の高校では、ストリートダンスが主流であり、創作ダンスやその他のダンスを取り入れている高校が少ないため、このような結果になったと考えられる。

「その他」の項目に含まれる回答としてアイドルダンスやコピーダンス、カバーダンスと回答している生徒が多く、YOUTUBE などの動画サイトの普及により近年ブームとなっているこれらのダンスが高校ダンス部においても人気があることが今回の調査でわかった。（図 4 参照）

4）ダンスについての悩み

自由記述を、共通の言葉を含む内容で分類した結果、振り覚えが悪い、格好よく・上手く踊れないという回答が10人以上と多かった。これらの悩みを見ると「技術面の悩み」（振り覚えが悪い・格好よく・上手く踊れない、速い・細かい動きが苦手、軸・体幹が安定しない、技ができるようになりたい、○○が踊れるようになりたい、リズム感がない、体が硬い、大きく踊れない、キレがない、身体の使い方がわからない、基礎力がない、手の使い方が難しい、振りを考えるのが苦手、スキルが低い）が多くを占めていた。他には、「環境面の悩み」（鏡がない、技術的な指導者がいない）、「精神面の悩み」（周りについていけるか不安、うまくなりたい）の回答があった。（図５参照）

図4　好きなダンスのジャンル（複数回答可）

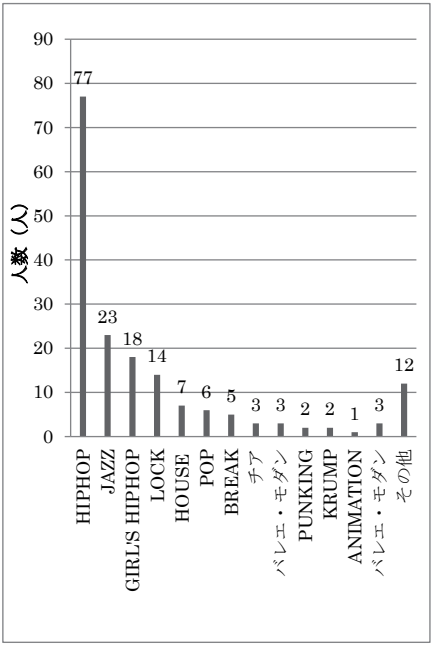


図5　ダンスについての悩み（自由記述）

5）ワークショップ受講の感想

多くの生徒が「楽しかった」と回答し、否定的な意見はほとんどなかった。一番多かったのは「基礎的なこと（ストレッチ、筋力トレーニング、アイソレーション、リズム取り）のやりかたが理解できた」という意見で、レベル的にも普段の活動よりも難易度が高かったので、「ストレッチ、筋トレがキツかった」、「難しかったけど、楽しかった」という意見が多かった。

他には、「普段の活動とは違う刺激をうけることができた」、「本格的なHIPHOPを体験できた」、「勉強になった」、「今後に活かしていきたい」、「もっとダンスを楽しんでいきたい」という意見が多かった。

講師に関しては「教え方が上手く、覚えやすかった」という意見が多かった。ワークショップ中は、少ない時間の中で講師がたくさんのアドバイスを投げかけ、生徒たちは真剣に受け止め、実践している姿が見えた。ワークショップ終了後にはダンスに関する質疑応答が行われ、ダンスの悩みに関する相談をしている生徒もいた。最後に、ワークショップの内容を振り返り、普段の地道なトレーニングや難しいことに挑戦することの大切さを生徒たちに伝えた。「ダンスに対して新しい考え方が生まれた」、「自分らしく踊ることができた」という感想もあり、生徒たちのモチベーションは向上したようである。

写真1　ワークショップ後の様子（講師：SE-YA）

6）アンケートから読み取れた高校ダンス部の現状と課題

今回のアンケート調査の結果からわかったことは以下の４点である。

①ダンス部に所属する部員のほとんどが高校からダンスを始めているので、経験が浅い。（図１、図２参照）

②部活動以外の場でスキルアップの機会を求めている。（図３参照）

③高校のダンス部ではHIPHOPの人気が高く、ストリートダンスを主として活動している高校が多い。（図４参照）

④ダンスに関する悩みとして、「技術的な悩み」が最も多く、次いで「環境面での悩み」、「精神面での悩み」が多かった。（図５参照）

これらは、各校によって程度にバラつきがあるが、道内の高等学校ダンス部に共通する項目である。高校の部活動でダンスを始めた、経験が少ない生徒たちが多く、部活動の中でスキルアップの機会を求めているが、指導者が少ない、活動場所や施設面での対応が十分にできていないという現状である。

4．高等学校ダンス部の活動状況

アンケートの結果から明確になった課題について、さらに詳しい状況を把握するために、２校の顧問の教員にインタビュー調査の協力を依頼した。札幌市内の市立高校と私立高校の２校の顧問教員を対象に以下の５項目の質問をし、回答してもらった。

【質問項目】

①顧問になった経緯

②生徒たちの様子

③部活動の問題点

④顧問を経験して良かった点

⑤活動状況（活動年数、所属部員数、活動場所・設備、活動日数・頻度、練習方法、ジャンル、参加大会、大会参加時の補助体制、年間行事、技術指導について）

1）札幌市内市立 A 高等学校

①対象：顧問教員（30 代女性・指導教科は理科・顧問歴 4 年目）

同好会立ち上げの段階から顧問を担当し、今年で 4 年目になる。演劇部の副顧問と兼任している。クラッシックバレエとコンテンポラリーダンスの経験があり、ターンやジャンプなど基礎技術の指導を行っている。

②ダンス部の生徒の様子

生徒が主導して同好会を発足したいきさつもあり、初年度は生徒がやりたいことと顧問や学校が同好会に求めることとの間に乖離が大きく、双方にとって苦しい状況であった。発足当初の生徒は、自分たちの格好良いダンスを観てほしいという一念でダンス同好会を発足したが、同好会・部として活動するということは、学校の管理下で、学校の中の多くの人の支えを得て、教育効果のある活動を行うということだという意識が生徒たちの中で薄かったように思える。

ダンス部生徒とダンス部を退部した生徒、軽音楽部生徒が大量に生徒指導の対象になったことをきっかけに、顧問が対象案件に関わった生徒全員と面談し、「ダンス部はどうあるべきか」ということを生徒と顧問で話す中で、部でボランティア活動を行うという意見が生徒から出てきた。このことをきっかけに、同じ市立学校である山の手養護学校と北翔養護学校でダンス交流を行うようになった。顧問だけではこれを実現することは不可能であったが、管理職の協力を得て実現した。はじめは多くの生徒がダンス交流に積極的ではなかったが、養護学校の児童生徒、教員、保護者たちが喜んでくれる姿や一緒に一生懸命ダンスを踊る姿を見て、満足感やこのような取り組みの必要性を認識したようである。

ダンスドリル大会への出場、学校祭での発表、自主公演は生徒たちにとって大きなエネルギーを費やすイベントであり、試行錯誤を繰り返し、仲間と協力することで、一生懸命に取り組む喜びや達成感を得ているようである。

ダンス部に入部してくる生徒は、発足当初は中学時代の部活動経験がなく、中学時代に部活動を途中で退部した生徒が多かったが、現在は、中学時代に部活動（主に体育会系）に所属していた経験のある生徒が多く入部

している。中学時代に部活動を経験している生徒はすでに集団行動をとることやルールを順守する姿勢が身についており、コミュニケーション能力が高いので活動がスムーズになった。

③部活動の問題点

指導上の問題は、顧問自身のダンススキルや作品を作る技術の不足を感じ、十分な指導ができていないことである。また、顧問の平日の活動時間が勤務時間外であり、休日練習にも負担を感じている。

今年で4年目になるが、いまだにダンス部の存在意義を問う声が学校内にあり、学校側の活動支援体制も整っていない状況である。活動場所は、大きな教室や体育館などは他の運動部が優先的に使用しているため、大会前は近隣の小中学校の体育館を利用している。また、活動にかかる費用が多く、負担できずに退部する生徒も中にはいる。

生徒指導上の問題も多く存在している。ダンス部として活動する上で音楽選びや動画の撮影などでスマートフォンを使用しているが、本来は校則では禁止なので、黙認している状態である。また、深夜の時間帯に開催し、アルコール販売のあるダンスイベントに行こうとする生徒もいるので、部活動外での指導が発生するという問題がある。

④顧問を経験して良かった点

学級担任とは違って、長期的に生徒と深く関わることができ、生徒たちの成長を目の当たりにできる。ダンスを作っていく過程で、生徒たちと感動を共有し、生徒たちの熱心な姿に接していく中で、自分自身も生徒たちに心を開くことができるようになり、ダンスを通して教育に携わるおもしろさを見つけることができた。

また、外部のさまざまな応援や協力をもらう機会があることで、自分自身もダンスについて勉強する機会を得ることができ、新しい発見がある。このような活動を通して、外部との繋がりの大切さや、部としての活動が認められていることを感じている。

⑤活動状況

表1【ケース1】札幌市内市立A高等学校の活動状況

活動年数	4年目（2011年～）

所属部員数	34 人（うち 3 学年 10 人・2 学年 14 人・1 学年 10 人）
活動場所・設備	大講義室・講義室・普通教室 音響機材は CD ラジカセ・可動式鏡（部費で購入） 大会やイベント近くには近隣の小中学校の体育館を借りて練習
活動日数・頻度	基本的には週 5 回（月・水・木・金・土）、大会・イベント近くは日曜日も活動
練習方法	ストレッチ、作品づくりと踊り込み
ジャンル	JAZZ/HIPHOP/GIRL'S　HIPHOP/ チアダンス / 創作ダンス
参加大会	ダンスドリル（POM 部門）
大会参加時の補助体制	エントリー費用は生徒会の予算から補助が出る。全国大会参加の場合、生徒は半額補助。顧問は全額補助。その他の引率は外勤と同じ扱い。
年間行事	６月　大会 ７月　学校祭 ８月　市立総文体大会（文化部） 10月　北海道女子体育連盟主催「創作舞踊発表会」 ３月　自主公演 不定期　養護学校訪問・児童会館での小学生のダンス発表のデモンストレーション
技術指導について	基本的には顧問と部員が協力して行っている。不定期で外部からの指導者を招いて WS を行っている。

2）札幌市内私立 B 高等学校

①対象：顧問教員 (20 代男性・指導教科は数学科・顧問歴 1 年目)

今年度より新任 1 年目でダンス部の顧問を務めている。先任も新任の教員が担当しており、毎年新任教員が顧問を担当する流れになっている。顧問の先生のダンス経験はないが、HIPHOP の DVD を購入したり、ダンス指導講習会に参加したりして勉強している。

②ダンス部の生徒の様子

看護クラスの生徒が多く所属しており、授業数や講習が多い中、うまく勉強と部活動を両立している。試験前は参加生徒が減るので、今年度から

試験３週間前から活動停止にした結果、赤点を取る生徒も減り、生徒たちの負担も減っている。

部活動は生徒たちのストレス発散の場として皆伸び伸びと活動に取り組んでいる。技術指導者はいないが、ダンス経験のある生徒が中心となって作品を作り、様々なジャンルに挑戦している。他の部活に比べ活動日数が多く、部員全体のモチベーションは高いが、入部生徒が少ないのが悩みである。

③部活動の問題点

スマートフォン・携帯電話の取り扱いについて難しく思うところがある。基本的に校則では禁止ではあるが、自分たちのダンスを動画で撮影するときには許可を出しているが、関係ないところで使用している生徒も中には見受けられるので、部内でのルール作りをしっかりしていきたい。

④顧問を経験して良かった点

大会やイベント時は部員同士協力して熱心に取り組み、パフォーマンス後には達成感を感じている姿を見ることができ、顧問としても充実感を感じている。

⑤活動状況

表２【ケース2】札幌市内私立Ｂ高等学校の活動状況

活動年数	4 年目（2011 年～）
所属部員数	11 人（うち２学年８人・１学年３人）
活動場所・設備	夏／体育館（毎回） 冬／体育館・生徒ホール 音響機材は CD ラジカセ・可動式鏡２台 (部費で購入)
活動日数・頻度	基本的には週３回（月･水･木）、イベント近くは土曜日も活動
練習方法	ストレッチ、作品づくりと踊り込み
ジャンル	JAZZ/GIRL'S HIPHOP/ アイドルダンス
参加大会	DANCE STADIUM（2014 年　特別賞受賞） 昨年まではダンスドリルに参加。
大会参加時の補助体制	エントリー費用は生徒会の予算から補助が出るが、全国大会参加の場合の補助はほとんど出ない。（2011 年度に全国大会参加時は、生徒に対し半額の補助があった。）

年間行事	７月　学校祭・大会 10月　北海道女子体育連盟主催「創作舞踊発表会」 ２月　卒業祭
技術指導について	技術指導者はなし。ダンススタジオに所属する部員が技術指導を行っている。

3）インタビュー調査からわかったこと

インタビュー調査した２校の活動状況を見ると、比較的活動するための環境は整っている様子であるが、大会参加時は近隣の体育館を借りたり（表１参照）、遠征費が出なかったり（表２参照）と、負担は大きいようである。道内では、まだ高体連、高文連が主催のダンス大会がなく、ダンス専門部[注3)]の設置がされていないので、学校側からの支援体制が十分に整っておらず、各高校によって差が生じている状況である。

生徒指導の面でもダンスの持つ特性や文化的側面が問題となっていることがわかる。インターネットが生徒たちにとってメインの情報源となっているため、ダンス部ではスマートフォンが多く活用されているようである。また、先行研究においても、ストリートダンスカルチャーが持つアンダーグラウンドな背景（服装、音楽、喫煙や飲酒、深夜徘徊などの風紀上問題とされる行動）と学校教育との不一致性を指摘している（中村・勢端・布施，2014）が、これらの問題は実際に道内の高校ダンス部の活動の現場でも起こっている様子である。

技術指導の面では、顧問教員のダンス経験が不足しているという問題を解決するための方策を探していく必要がある。顧問間、部活動間の横の連携を取ることができれば、講習会を開いたり、合同練習の場を設けたりすることができ、お互い刺激を受けることができる。道内では、高体連や高文連にダンス専門部が設置されていないため、ダンス部間の交流の機会が少なく、全体のレベルの底上げも難しいという状態である。

また、ダンス部の活動を通して感じられる達成感や教育的な側面があることが述べられている。練習や作品づくりは顧問と生徒が協力して行っている様子であり、発表を終えたときにはお互いが達成感を感じているよう

である。生徒たちが部活動を進めていくには、顧問の働きかけやサポートが必要であり、また顧問にとっても生徒たちとの信頼関係を作ることが部活動を運営していくうえで重要である。

5. まとめと今度の研究の展望

1）まとめ

北海道の高校ダンス部の活動の現状と課題は、先行研究（中村・勢端・布施 ,2014）と同様に、①指導者が不足していること、②活動場所や施設が十分であること、③生徒指導上の問題が発生することが挙げられる。

今回の調査では、北海道の特性としてストリートダンスを主として取り組んでいる高校が多いということがわかった。道外では、社団法人日本女子体育連盟主催の「全日本高校大学ダンスフェスティバル（神戸）」（以下、AJDF 神戸）という創作ダンスの大会に毎年 100 校近くの高校が参加しているが、道内の高校は 1 校も参加していない。この大会は予選も神戸で行われ、北海道の予選が開催されていないので、遠征費の問題で参加が難しい大会であり、北海道では創作ダンスの取り組みが一歩出遅れている状態である。

また、ダンスドリルや USA などの大会は、元々チアリーダー系統の大会なので、チアリーダーを活動に取り組んでいる高校がいくつか見られる。ダンスドリル大会においてはたくさんのカテゴリーが存在するが、他の地域と比較すると、HIPHOP 部門への参加が偏っている状況である。また、一部の常連校を除いては、全体的に北海道地区のレベルは低いので、底上げをしたいという団体側の意向もある。

ダンス部の活動に対する学校側の支援体制が整っていないことの原因として、道内に高体連、高文連にダンス専門部がないこと、ストリートダンスを部活動ですることに対する学校側の理解が不足していることが考えられる。DANCE　STADIUM や AJDF 神戸の大会は、後援に全国高等学校体育連盟がついているが、高体連の主催大会ではないため、遠征時の支援体制は学校によって格差がある。

ストリートダンスを学校教育で行うに関しては、様々な見解があるが、部活動として取り組むことで生徒達が達成感を感じることでできるという側面があるので、顧問が生徒指導上の問題を意識しながら、学校教育の一環としてダンスを取り組む意義を生徒たちにも考えさせることが必要であると感じた。また、顧問にインタビュー調査を行ったA高校の事例のように、ボランティア活動を積極的に行っていくなど、活動の幅を広げていくことで生徒達が成長する機会を設けることが大切である。

顧問教員にダンスの専門的な知識、技術があると、実際の活動の場で生徒たちとの信頼関係を構築することができるが、生徒たちに任せっきりになってしまうと、活動の状況把握が難しくなり、問題が発生しやすくなる。生徒主体の活動になるという利点もあるが、ある程度のマネージメントを行っていかないと、生徒たちとの繋がりが希薄になり、生徒にとっては「名前だけの顧問」になってしまう。このような状況にならないように、知識や技術がない顧問でも一緒に考え、活動を見守っていく姿勢を見せることが必要である。また、顧問教員自身のモチベーションが低下し、部活動全体が悪循環に陥らないように　、学校側の支援も必要であると感じられる。

ダンス経験のない顧問が技術指導を行うことは難しいが、外部コーチを招いて指導を行うことに対しても問題点がある。一つは、予算の問題である。今回の「DANCE × DANCE WORKSHOP CARAVAN」で各高校を訪問した際に、無料でなければこのようなワークショップにも参加できないという声がいくつかあった。今回は無料での訪問だったので、どの高校も快く受け入れてくれた。もう一つの問題は、教育現場にストリートダンサーが入ることに対して抵抗感があるということである。指導者として、服装やマナーなどの面で生徒たちの見本となり、指導することが求められる。また、ダンスを行うときに怪我や事故を防ぐための安全を確保することも大事である。ただ、ダンスの技術指導だけでなく、顧問教員と連携をとり、生徒たちとのコミュニケーションをしっかりとることのできる人材が外部コーチとして望まれている。

今後の改善策としては、以下のようなことが検討できる。

①ダンス指導ができる教員の育成
②教育現場の事情を理解し、指導ができるダンサーの育成
③顧問教員が勉強できる場の提供、顧問教員同士の横のつながりを作れる場の提供

まずは、指導者側の問題を解決し、生徒たちが生き生きと活動できる場をつくることが必要である。これは、保健体育科におけるダンスの分野においても同様なことが言えるが、急には進展させることが難しいので、長期的な計画を立てて取り組んでいくことが望ましい。

2）今後の研究の展望

①引き続き、より広い範囲を対象に高校ダンス部に対するアンケート調査、顧問に対するインタビュー調査を続けて、実態を把握する。
②他県がどのような現状であるかを調査する。特に、高体連・高文連のダンス専門部がどのように機能しているかを調査する。
③昨年３月に本学に設営された「ダンスコミュニケーションラボSCore」を地域の高校ダンス部を対象にどのように活用できるかを検討する。

以上３点について今後も検証し、報告をしていきたい。

［注］

1）今年度の北海道地区予選は、本学プレアホールにて開催された。
2）ダンスにおいては経験年数３年で区切られることが多く、オーディション等でも「ダンス経験３年以上」と応募資格制限を設けることが多い。
3）ダンス専門部は高体連、高文連のどちらに所属するかは各都道府県により異なる。
高体連にダンス専門部が設置されている都道府県：東京都、神奈川県、埼玉県、栃木県、新潟県、鹿児島県。
高文連にダンス専門部が設置されている都道府県：宮城県、長野県。

参考文献

1）中村なおみ、勢端多恵子、布施典子：「高等学校におけるダンス部の活動実態及び部員の意識調査～東京都における急増するダンス部の現状と課題～」『Research Journal of JAPEW30』pp.69-79,2014
2）中島美智子、林信恵、河下亜紀子：「高校生ダンス部部員のダンスに関する意識調査 (1)」『大阪体育大学紀要第 24 巻』pp.43-51,1993
3）中島美智子、林信恵、在間史枝：「高校生ダンス部部員のダンスに関する意識調査 (2)」『大阪体育大学紀要第 25 巻』pp.43-51,1994
4）「公益財団法人全国高等学校体育連盟　平成 26 年度　公益財団法人　全国高等学校体育連盟　事業計画」http://www.zen-koutairencom/f_planning.html（2015 年 1 月 13 日）
5）文部科学省　運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議「運動部活動の在り方在り方に関する調査研究報告書～ひとりひとりの生徒が輝く運動部活動を目指して～」http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/__icsFiles/afieldfile/2013/05/27/1335529_1.pdf（2015 年 1 月 21 日）

謝辞

本原稿を掲載するにあたり札幌大学　山田玲良教授、札幌大学女子短期大学部松本源太郎教授よりご推薦をいただきました。研究を進める過程では、北翔大学　増山尚美教授より専門的な視点からご指導いただきました。深く感謝しています。

また、今回の企画を共同実施してくださいました KING PRO. の皆様にも感謝しております。

そして、本研究の趣旨を理解し、快くアンケートにご協力いただいた道内 7 校のダンス部顧問の先生、生徒の皆様には心から感謝しています。ありがとうございました。